ときめき アパート性活

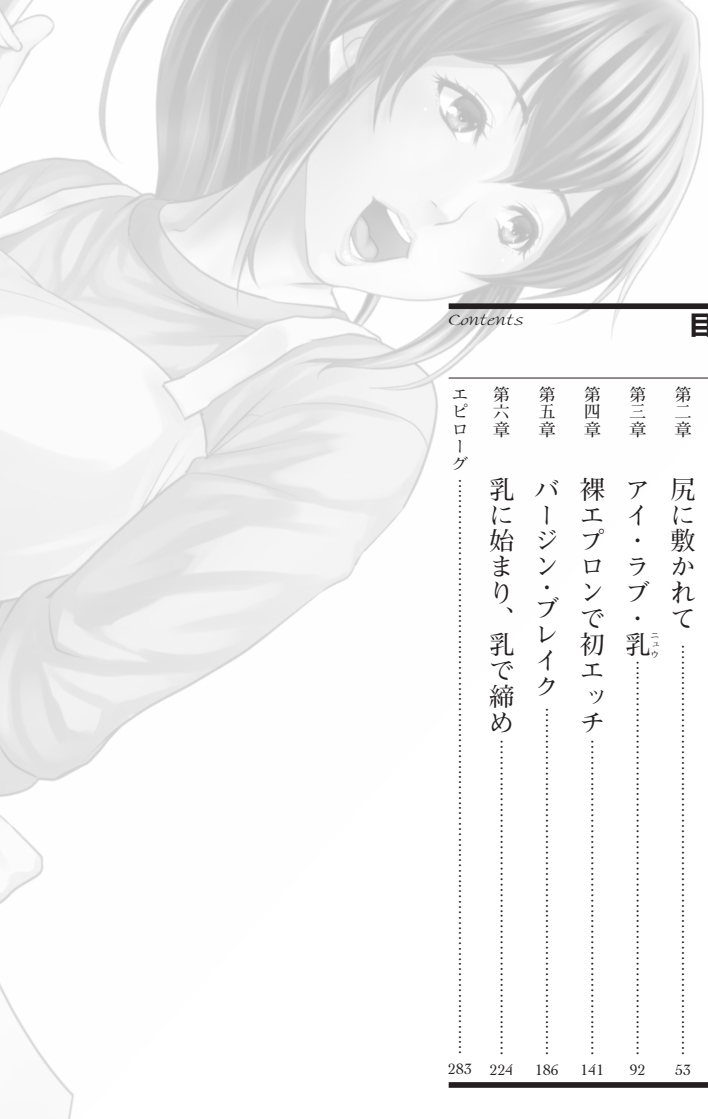
愛しの管理人さんと魅惑の隣人たち

空蝉

挿絵／ロッコ

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION



Contents

目次

第一章　お姉様の童貞指南……4
第二章　尻に敷かれて……53
第三章　アイ・ラブ・乳（ニュウ）……92
第四章　裸エプロンで初エッチ……141
第五章　バージン・ブレイク……186
第六章　乳に始まり、乳で締め……224
エピローグ……283

登場人物 *Characters*

真島 賢太
(まじま けんた)

ひなた荘の五号室に住む十九歳の浪人生。容姿も体形も平均的な童貞。要領が悪く冴えないが、真面目で一生懸命なお人好し。美幸に一目惚れし、一途に想いを募らせる。

三波 美幸
(みなみ みゆき)

ひなた荘の一号室に住む二十五歳の管理人。Hカップの爆乳に安産型のお尻と肉感的なボディ。ポニーテールに纏めた黒髪をなびかせる、笑顔が似合う朗らかな女性。

千葉 朱里
(ちば あかり)

ひなた荘の六号室に住む二十九歳のホステス。スリップ姿でアパート内を闊歩する豪快な性格。酒とおしゃべりを愛する、欲求に素直で明け透けな女性。賢太の昔馴染み。

三波 結
(みなみ ゆい)

ひなた荘の二号室に住む十八歳の女子高生。美幸の妹。頭脳明晰、好奇心旺盛で怖いもの知らず。賢太の不器用さと誠実さに好意を抱いている。

第一章　お姉様の童貞指南

1

九月も終わりに近づき、街路を歩けば落ちた紅葉の葉が嫌でも目に入る、今日この頃。秋の気配が深まるにつれ、ある種の人々の胸には言いようのない焦燥が去来する。

「……あと、もう四か月もないのか」

明くる年のセンター試験を控えて焦り募らせる、受験生。

築六十年を超える木造ボロアパート「ひなた荘」に暮らす青年、真島賢太（まじまけんた）もまた、その一員だった。

「……はぁ」

秋風に吹かれてガタガタと窓が鳴る。その向こうに覗く夕景色の艶やかさを目にしても、口をついて出るのは溜息ばかりだ。

着古した長袖Tシャツとゴム紐ズボンという、人目がないからこその部屋着姿で、座卓の前に腰を落ち着けてから、早三時間。改めて広げた参考書とノートに目を落と

すも、お世辞にも効率よく進んでいるとは言えない。上手くいかない状況に気が逸(はや)るばかりで、集中力は削がれゆく一方だ。

すでに昨年失敗を経験した一浪の身である事も、人一倍の焦りを生む一因となっていた。昨年の受験前に啖呵を切って東京に出てきた手前、郷里の両親に金銭面での援助を願うわけにもゆかず、家賃と食費をアルバイトで賄いながらの受験勉強。その疲労が蓄積している事も、集中力の欠如に一役買っている。

「……はぁぁ」

隙間風が吹き込む年季の入った部屋壁にいくら嘆息をぶつけてみた所で、悪循環から抜け出せるわけではなかったが――。

自身の居室である五号室の扉へと近づいてくる、廊下の軋み音を耳にしてしまったからには、もう、今まで以上に盛大な溜息を吐かずにはいられない。

災厄は容赦なく、今日もいつも通りの時間に訪れた。

「よー、苦学生。相変わらずしけた面してるねぇ」

遠慮の「え」の字も感じられない大股で五号室の戸を開け放ち、姿を見せたのは、妙齢の女性。金に染めたセミロングヘアを靡かせて歩み寄る彼女の頬や目元には、すでに酔いを示す火照りが差していた。

元より垂れ目がちの眼がトロンと酔いにまどろむ様は、知った仲である賢太からすれば見慣れたもの――のはずが、毎度艶めかしさを感じずにはいられない。赤いリップの乗った唇がまた、色っぽさに拍車をかけていた。

千葉朱里（ちばあかり）。隣の六号室の住人である彼女にウインクを浴びせられ、賢太は自身の頬にも火照りが差すのを実感した。

「朱里さん。またそんな格好で……！　ちっとは気を遣ってくださいっていつも言ってるでしょ」

目を背けつつ、日々の恒例となった苦言をぶつける。

無遠慮に受験生の部屋を訪ねてくる時点で相当だが、加えて、纏っている服装がおかしい――はっきり言って異常だ。二十九の熟成されたプロポーション。身長百六十六センチの肢体と、一個ずつが手に余るサイズの胸の膨らみ二つ。それらを覆うのが、ただの二枚。今にも透けそうな薄手のスリップと、その下に隠れているショーツのみという有様なのだから、十九歳の健全男子としては目のやり場に困ってしまう。

「いっちいち着替えるの面倒なのよねぇ。家でぐらい楽な格好でいたいっていうか」

十歳下の青年の照れぶりに気づいた朱里が、ブラの締め付けられる感じが好きじゃないのよ、とノーブラの胸を反らしながら語る。

薄手のスリップに乳房の丸みや谷間が陰影となって浮かんでいるのがかえって妖美に感じられ、賢太は赤面を誤魔化すべく声を荒らげた。
「俺の部屋はあんたの家じゃありませんっ。自分の部屋でだけにしてくださいよ……もうっ」
朱里があまりにもあっけらかんと言い放つものだから、苛立たしさから、つい昔の癖が出る。拗ねた子供めいた口調が、かえって昔馴染の女性の興を煽ってしまう。
「今の、すんげー懐かしい。ガキの頃、あたしが構ってやらないでいると、よくそうやって唇とんがらせて、むくれてたよね」
またわざと「ひっひっ」と意地悪い笑みまで追加するものだから、余計に癪に障る。
「いつの話してるんですっ」
結局いつも朱里のペースに呑まれる。互いに古くから見知っていて、腹の内が読めてしまうからこその弊害だ。実家が近所で家族ぐるみの付き合いが行われていた事もあり、ちょうど十歳上の朱里は物心ついた時から賢太にとって姉同様の存在だった。
「小さい頃の賢坊。お姉ちゃん、お姉ちゃーんって懐いてきて。かんわいかったぁ」
「こ、こら。抱き付くなっ！　やめてくださいってば！」
当時の賢太はまだ小学生。背も低く、今されているのと同じように後ろから抱きす

くめられると、すっぽり彼女の腕の中に収まっていた。その頃から華やかな外見の朱里は、少年の目に実年齢以上に大人びて見えたものだった。

が、今では身長百七十センチの青年の身だ。背丈も逆転し、顔つき、肩幅、骨格、いずれも成年とほぼ遜色のない、十九のれっきとした男である。

当時同様の処遇をされると、照れ臭さを覚えると同時に、子供扱いをされているようにも感じられ、どこか面白くない。

「おーお、酒が入ってもないのに赤くなりおって。……ひひ。なんなら今晩のオカズにしてもいいんだゾ」

抱き付く腕に力を込め、意図的に胸を押し当てる朱里の明け透けな発言。からかい目的と気づいていながら、賢太の耳が火照りに染まった。

「酔ってるんでしょ。早く部屋に戻って寝た方がいいですって」

抵抗と拒絶の意思を舌に乗せつつも、内心では背に当たる膨らみの感触から、形状まで想起して、眩みを覚える。背に当たる肉の温(ぬく)みと弾力から意識を逸らせないでいるうちに、胡坐(あぐら)を掻いた股間の中心地に血潮が雪崩れ込むのを自覚していた。

――昔から遠慮のない人で、こっちが泣いてようが悩んでいようがお構いなしに押し入ってきた。子供時分はそれが疎ましくもあり、常に構って気にしてもらえている

という嬉しさもあったものだが――。
「とにかく！　勉強の邪魔だけはしないでくださいっ」
追い詰められつつある受験生にとって、彼女の図々しさは、毒だ。
「根詰めても、ろくな結果出やしないって。というわけでぇ……飲も♪」
今の今まであえて目を逸らし続けてきた、彼女の右手に握られている物。一升瓶を見て、酒酔いとは別の頭痛が賢太の脳裏に去来する。
行き詰まって見える弟分を見かねての朱里なりの気遣い、とも思えたが、勧められた側はまだ飲酒未経験。対する朱里は超のつく酒豪だ。仮に受諾すればどうなるか、想像するまでもない。
「何度持ってこられても絶対飲みませんから。俺は勉強しなきゃ、いけないんです」
「いやいやいや。今だって窓向いて黄昏れて、ちーとも身が入ってなかったっしょ」
きっぱりと意思を伝えたつもりが、かえって賢太の側が痛い所を突かれてしまった。
「……ンフ」
「な、なんです急に。気味悪い含み笑いなんかして」
「その強がりって。あの、近づいてくる足音の主のせいかなぁ？」
「え。足音って……うぷ！」

思わせぶりな態度につられ振り向いた賢太の顔に、酒臭い吐息が吹きかかる。噎せた弟分の姿を見てまた、朱里が意地の悪い笑みを浮かべた。その身動きに合わせて、賢太の背に当たる膨らみも揺れ弾む。

（ああ、もう……っ。辛抱だ。辛抱っ）

意識してしまえばすぐにでも胡坐の中心が隆起しそうな気配があったから。半ば無理矢理に朱里の身を引き剥がし、彼女が開け放したままとなっていた五号室の扉へと、意識を向けた。

ギシ、ギシと廊下の板の軋む音に、パタパタと軽やかなスリッパの音が重なり響いている。真っ直ぐここ五号室に近づいてくるその足取り。

（これって……）

ここの住人でスリッパを履いているのは一人だけ。誰の足取りかを認識した途端に、賢太の胸が強く高鳴る。

逸る心情そのままに、胡坐を掻き座っていた足の指が落ち着きなく小刻みに動きだす。その様を見て取った朱里がおかしげに吹き出したけれど、すでに賢太の胸中で苛立たしさは霧散していた。

「は、早く離れてっ」

「いいじゃん。どうせいつもの事だし。管理人さんも、目くじら立てやしないって」
そういう問題じゃない。わかってる癖に――。恨めしげな眼で朱里を見据えるも、ギュッと抱き付く力を込めた彼女を振り解く事叶わず。
ついに廊下の足音が止まり、件の人物が五号室の扉向こうから顔を覗かせる。
「真島さん、勉強の調子は……ど、う……」
「か、管理人さん、違うんです。これは」
賢太が危惧した通りに、現場を目撃して固まってしまったひなた荘の女管理人、三波美幸と顔を合わせる賢太にも緊張の強張りが訪れる。
彼女にこうした場面を見られるのは、今月だけでもすでに七度目。誤解されなくとも、毎度の事と呆れられる。女一人追い返せない頼りない男と思われる。何よりそうした事態を賢太は恐れていた。
「やほ。管理人さん」
静寂に包まれかけた場にあって、ただ一人笑みを絶やさないでいる朱里に呼びかけられ、まず二十五歳の女管理人が我に返った。最初からそれが目的だったと言わんばかりの迷いのなさで五号室に踏み入り、朱里に歩み寄るや小言を連ねだす。
「……もう。またそんなはしたない格好で。真島さんのお邪魔になるから遠慮願いま

すって前回も言ったじゃないですか」
同性でも直視憚られる朱里の格好から、視線を外して俯く美幸。事態を予測していながら目撃するや否や固まったのもまた、人一倍性方面の話題に恥じらいを見せる彼女らしい。二十五歳にしては初心過ぎるきらいのあるそうした挙動がまた余計に、十九歳の切ない慕情を駆り立てる。
「別にビーチク透けてるわけでもなし。いいじゃん。この子も日がなボッチで机に向かってるよりかは、気分転換させた方がいいって。絶対」
「朱里さんの場合は、気晴らしレベルにとどまってないです」
気を取り直して、数えきれないほど繰り返した小言を改めて連ねる美幸。
（管理人さん……今日も、綺麗だ）
朱里のあしらいにもめげずに、懇々と説教を続ける姿に内心感謝しつつ。賢太は秘めたる慕情を抑えきれず、改めてそろり、想い人に目を向けた。
ポニーテールにまとめられた、ロングストレートの黒髪。その艶めきの下にある、きりりとした目元、綺麗に整った鼻筋、驚きで小さく開いた唇から覗く前歯までもが愛らしい。
「さ。まずは真島さんから離れましょう」

「あぁ、うん。わーった、わーったってば」
決して強弁せず、真正直な説得に終始する。温厚で真面目な美幸らしい物言いに堪りかね、朱里は渋々賢太の背から身を離す。事態を収めた達成感と、素直に聞き入れてくれた朱里への感謝を表して、美幸は含みのない笑顔を見せた。
ジーンズに桃色の長袖スウェット。飾り気のない白エプロンの下の活動的な出で立ちと対照的に、基本柔和な物腰と笑みを絶やさない。
惚れた欲目、贔屓目を抜きにしても「気立てのよい美人」という表現以外に表わしようがない気がする。改めて惚れ直した賢太の惚け顔を、その美幸の優しげに細められた眼がいつの間にか見つめていた。
机に向かう青年の肩に触れるか触れないか、といった至近距離。前屈みとなって覗き込む彼女のエプロンに包まれた胸元は、残念ながら肩甲骨付近を抱くように腕組みした彼女自身の手に遮られて窺えず。代わりに銭湯から帰って間もないのか、ポニーテールから漂うシャンプーの香りが、賢太の鼻孔をくすぐった。
派手に着飾っているわけでも、朱里のように過剰な色気を振り撒いているのでもない。なのに女性としての魅力を強く感じ、惹きつけられてしまう。
エプロンとスウェットのさらに下に隠されている、秘めたる部位。服の上からでも

朱里のものより一回りは大きいと予測される、肌色の膨らみ。さっきまで押し当てられていた朱里の胸の感触がまだ背に残っているだけに、童貞男子の妄想が膨らむ。
「真島さん？　あの……お勉強、頑張ってくださいね」
相対する男の邪な気持ちに気づかぬまま捧げられた激励の笑顔が輝かしいほど、相対的に賢太の内には罪悪感が募る。
「はっ……はいっ。す、すみません」
「何謝ってんの。……はっはーん」
赤ら顔で察したらしき朱里のからかいに身構えるも、美幸が割って入ってくれたおかげで、またも難を逃れる。重ねての礼を伝えようにも想い人であるがために直視できず。もじつくばかりの賢太を見て、また年下の子供を慈しむような表情で、美幸が微笑む。
（ああ、やっぱり、子供扱い、されてるのかな。でも……いつかは）
半年以上になる片思いの結末は、ハッピーエンドにしたい。忸怩たる思いを抱きつつも飛躍を誓う賢太は、美幸と初めて出会った日を回顧する。
受験失敗後、郷里に戻らず、もう一年東京で頑張る事に決めた。そうして手持ちでどうにかなる住処をと探し回った結果行き付いたこの場所で、先行きの見えぬ不安と、

新たな生活への仄かな期待に惑う中で、出会った女管理人に一目惚れした。
（隣の部屋にまさかの朱里さんが居たのは、誤算だったけど……）
それでも美幸の傍にいたい一心で、即日入居を決めた。以来、七か月。安直と言われても仕方ないが、彼女に認められたいという想いが今、賢太の受験に臨むモチベーションの一つとなっていた。
慕情が募るほどに、よく見られようと努力する。その都度美幸からは「気を遣わないで」「勉強に差し障ったら悪い」との、気遣い返しを受けるのが常。
目をかけてもらえているという嬉しさがある一方で、子供扱いされている感じもして、悶々とする事も少なくない。結局の所、自分は浪人生で相手は職を持った大人の女性。そんな引け目が、賢太に一歩踏み出す事を躊躇わせていた。
「朱里さん。さ、行きましょう」
募る想いで潤む眼が見つめる先で、美幸が、座り込んだ朱里の肩を揺する。
「まだ飲み足らなぁい。な、賢太。せっかくだし、管理人さんと飲みたいよな？」
「え……っ」
美幸の酔い火照る様を想起した賢太が、一瞬返事に詰まる。反応をわかっていて聞いた朱里がまた意地悪い顔で笑い、床に寝そべりかけた。

「真島さんも困ってますから。ね。お部屋に戻りましょう」
「あーらら。管理人さんは賢太の味方なのね？」
「この場合どう見ても、そうするでしょう？」
「へー。んふ、んふふふふぅ、なるほどねぇ」
「こ、こら、酔っぱらい！　管理人さんに絡むんじゃない！」
呆れ混じりの美幸に対して朱里が絡む素振りを見せたため、間に入ろうとした賢太だったが、当の美幸の手に制止され、首を横に振られてしまった。この場は任せて、という事らしい。
「……私がお付き合いしますから。だから、ねっ。お部屋に戻りましょう」
「か、管理人さっ……むぐうっ」
自分の事で迷惑はかけたくない、との想いから発しかけた言葉も、彼女の手により口内から吐き出される事なく留め置かれる。
――柔らかい。触れた手の平の温みに、たちまち意識が持っていかれた。
「よぉし。わかった。そんじゃ、じっくり、あたしの部屋であんたの話を聞こうじゃない。へっへっへ。根掘り葉掘り聞いちゃいますよぉ～」
「わっ。こ、こら、急に立つと危ない！　……って、酒臭っ」

千鳥足で立った朱里が転げるのではとの危惧から、賢太が駆け寄って肩を貸す。立つのを手伝った褒賞として、わざわざ口を寄せてきた朱里から酒臭い吐息をいただく。

（……い、一瞬キスされるかと思った）

反射的に賢太は美幸の方に目を向け様子を窺うも、彼女の方は朱里が口を寄せたのを見咎めていたのかどうか。

笑顔の消えた美幸の表情は、怒りを静かに堪えているとも、ただ朱里の部屋へ向かう心支度を整えているだけとも、捉えようによって如何様にも受け取れる。

賢太にとっては恋慕というフィルターを通さずに見る事は難しく、また恋愛経験のなさから女性の感情の機微にも疎いため、判断は叶わなかった。

「それじゃレッツ、ゴー。おー！」

手を上げて一人ガッツポーズを取る朱里の背を押して、共に部屋を出る道すがら。

「朱里さんの事は私に任せて。真島さんは、受験勉強。頑張ってくださいね」

去り際にいつも通りの笑顔で、美幸は励ましの言葉をくれた。

「とにかく悔いのないように、精一杯」

朱里に肩貸す傍ら、空いた手で軽くガッツポーズをしてみせてくれる。それだけでいつもより距離が縮まっているように感じられ、賢太の胸に日頃以上の感激が湧いた。

すぐ隣の六号室へと消えていく後姿を見送って、賢太は先程まで美幸の指が触れていた自身の唇に、そっと右の手指を這わせた。
（管理人さんの唇は……もっと、ずっと柔らかい……んだろうな……）
想像でしか知り得ない感触に想い馳せ、悶々としかけるのを、嘆息と共に追い出す。
（管理人さんの気遣いを無駄にしないためにも、今は勉強を頑張らなきゃ）
善意の人である彼女に、まだ恋人でもない自分が懸想するなど、もってのほか。頭を振って強引に意識を切り替え、賢太は机とノートのもとに戻っていった。

2

美幸と朱里が去ってから、三時間弱。目覚まし時計が午後九時を指し示し、アラームを鳴らしたのを契機に、賢太はノートに走らせていたペンを止めた。
「んっ、んん……っ」
伸びをして凝り固まった身体をほぐしながら、湧き上がる手応えを実感する。あらかじめ定めておいた刻限まで集中力を切らす事なく勉強に打ち込めたのも、美幸が朱里を連れ出してくれたおかげだ。

「……さすがに、もう自分の部屋に戻ってる、よな」
管理人である美幸の住まいは、一階の左手奥に位置する一号室。
二階の五号室に賢太、六号室に朱里。一号室が美幸で、二号室にもう一人。一階に二人、二階に二人の計四人が、今現在ひなた荘に居を構える住人の全てだった。
（今からでも、お礼を言いに行きたいけど……）
時間が時間なだけに、図々しく思われたり――はないだろうが、礼なんていいから勉強に専念して、と言われる可能性は大いにある。しかしそれでも、礼節は通した方が印象が良いはず。
いつも通りを心がけよ、と己に言い聞かせ、深呼吸をして落ち着きを図る。
「ん……？」
意を決して廊下に出ようとした矢先。
コン、コン。コン、コン。断続的に、五号室と六号室を隔てる薄い壁が鳴る。音は壁向こうから、つまり六号室側から届けられていた。
また、朱里さんか――。無視しよう、と決め込むまでにさほどの時間は要さなかった。彼女の酔いが醒めてない可能性も高い状況下。わざわざ絡まれに行く事はない。
部屋を出る直前まで、確かにそのつもりでいたのだが――。

「だあぁっ！　いったい何なんですか、朱里さんっ」
あまりに延々鳴り響くものだから、どうにも気になって仕方なく。文句の一つでも告げるついでと、半開きだった六号室の戸から中へ。顔を覗かせてしまった。
「よっ」
手を上げて応えた部屋の主は、自身のベッドに腰かけて、相変わらずの赤ら顔で出迎える。が、部屋に入るなり賢太の視線が捉えたのは、別の人物。ガラスの座卓に上体を乗せるようにして眠る女管理人の背中だった。
「まさか……今の今まで飲んでたんじゃ」
「イエス、アイ、ドゥー」
「楽しげに言わんでくださいっ。管理人さん、管理人さんっ」
蟒蛇（うわばみ）の朱里に潰されてしまったのではとの危惧から歩み寄って肩を揺するも、美幸は安らかな寝息を立てている。朱里に話を聞くと「上機嫌でつい先程まで飲んでいたが船を漕ぎ出したため、あんたを呼んだ」との事。
「あんたがなかなか迎えに来ないから、この通り。熟睡しちゃったわけよ」
「なら、じかに呼びに来てくださいよ……」
呆れ混じりの嘆息に続いて飛び出しかけた「危うく無視する所だったじゃないか」、

という言葉は、すんでの所で呑み込んだ。
「廊下寒いし。ベッドから出たくなーい」
ベッドの上からの返答は予想通り。わざわざ問答を長引かせる二の句を告げなくて本当に良かったと、心底から思う。
「……くしゅんっ」
「……っ！」
不意に美幸がくしゃみをした。眠りながら、朱里の言葉を体現したかのように身震いもする。本当に寒そうな様子を目にして、「身代わりに深酒をした美幸に風邪を引かせては申し訳ない」との想いが賢太に行動を促す。
「お……っ？」
珍しく驚きで目を丸くする朱里の前で、賢太が美幸の身体を抱き上げる。眠る彼女の揃えた両膝裏と、背に、各々回した二本の手を支点にして抱く格好。俗に「お姫様抱っこ」と言われる体勢だ。
「おー。やればできるじゃない。ひひ、いつもより男らしく見えるゾ」
朱里の茶化しに耳を傾ける余裕は、すでにない。
（温い。柔らかい。美幸さんの寝息が、俺の、む、胸をくすぐって……！）

酔っているせいか美幸の体温は高く感じられ、手指と腕にかかる柔らかな重みをより甘美な物として記憶させた。強く抱き締めたい衝動に駆られつつも、美幸を起こさぬよう細心の注意を払って六号室を出る。

「……っ、んぅ……」

廊下の寒さがこたえるのか、眠り姫が腕の中で身じろぐ。抱える側としては落とさぬよう、よりしっかりと抱き留める事を意識づけられた。

（女の人の身体って、どうして、どこもかしこも、こんなに……柔らかいんだ）

動悸が速まり、息苦しさすら感じるのに、いつまでもこの時が続けばいいと考えてしまう。至福に浸りながら、触れ伝わる彼女の温みに溺れる事を望んでいる。

ふとした拍子に指先に触れる、ジーンズ越しのヒップの温みと触れ心地も、堪らなかったけれど。歩みに合わせて息づき弾む、彼女の胸元の二つの頂。仰向けでも明らかな実り豊かな双巨峰に、目を奪われた。

――実際に触れると、どのような心地なのだろうか。妄想に憑かれて上気した、まさに夢見心地といった様相で階段を下る。一段下るたびエプロン越しの揺れに目を見張り、情けなく鼻息が乱れた。

兎にも角にも美幸を落とさぬ事と、その肢体を五感で感じ記憶する事。集中するあ

まりに、階段の軋む音すら耳に入らずじまい。
「……っ、ふ、ぅっ……すぅっ……」
背に回した手で引き寄せて抱き、壊れ物を扱うような慎重な足取りでようやく階段を下り終えた時点で、昂り過ぎた動悸が眩暈まで誘発する。息を整えようと深呼吸をするも、収まらぬ夢見心地が早速心拍数を上げにかかる。
無意識に肌寒さを回避しようとすり寄ってくる美幸に対し、慕情は天井知らずに堆積していくばかりだ。押し当てられたエプロン越しの二つの膨らみ。その予想以上の質量を感じ取り、賢太は鼻の奥と股間に熱が滾るのを実感した。腕に当たる感触は夕方に同じように体感した朱里のそれより、確実に大きい。
ここまで意識して律していた下半身に血が集まるのを、もはや賢太自身の意志でも止めきれなくなりつつある。
（管理人さんのおっぱい。おっぱい。寝顔も……っ、可愛い……！）
ついじっと凝視してしまった想い人のいとけない寝顔にまた胸がときめき、視線を逸らせなくなる。安らかな寝息を立てるその唇に、今なら触れる事ができる――。
湧き出た不埒な考えを、生唾と一緒に喉元へと押し込み、賢太がブルブルと首を振る。そんな状況下で、幸か不幸か。眼前の扉が、不意に開かれた。

一階に三つある個室の内の、真ん中。二号室から顔を覗かせたのは、前下がりに揃えられたショートの黒髪が理性的な顔立ちに似合う、少女。パジャマ姿で登場した彼女は、前触れなく出くわした事に驚きを表しもせず。賢太と、その腕に抱えられる美幸の顔を順に覗き見て、状況把握に努めている。

驚きにより劣情が引っ込んだ事に内心安堵して、賢太は事情説明を試みた。

「え、と……細かい事情は省くけど、管理人さん、朱里さんに付き合わされて、酔い潰れちゃってて。その、起こしたくないから一号室のドア、開けてもらえる？」

助けを得られなければ美幸を冷たい廊下に一度下ろさなければならない。

せっかく安らかな寝息を立てている美幸を起こしたくはないという想いと、もう少しだけ長く抱いていたいという男としての気持ち。その二つともを多分に含んだ賢太の早口に、瞬き二つで応えた後。

「……わかった」

パジャマのまま廊下に出た彼女は賢太の前に身を進ませ、すぐ先の一号室へと足を向けてくれた。

「ありがとう、結（ゆい）ちゃん」

ひなた荘の住人の中で最年少、最も小柄な少女の背に向かい、賢太の口から素直な

感謝の言葉が贈られる。
三波結。美幸の七つ下の妹である彼女もまた、四か月後のセンター試験に臨む者の一人。賢太と違い、現役の受験生だ。
「……どの道今から、お姉ちゃんの部屋に行くつもりだったから」
寝間着姿で現れた理由は気心知れた姉の部屋に行くつもりだったから。それとなく明かして、わずかだが恥じらう素振りを見せる。その様が年齢以上に幼い印象を与え、賢太は図らずも一瞬、ときめかされた。
「布団敷いて寝かせておくから」
気を取り直した結は眉尻を少し吊り上げたのみだったが、機嫌を損ねたのでない事は雰囲気から察せられる。
「う、うん。それじゃ、よろしくお願いします」
そっと抱いていた美幸の腰を床に下ろし、手放す。その際、熱源を失った腕に喪失感が雪崩れ込み、結と対照的に顔に出やすい賢太の眉が切なげにたわむ。
「お、おやすみなさいっ」
じっと見つめてくる年下娘に内面を見透かされたようで気恥ずかしく、逃げるように賢太は場を辞した。

逸る心拍を噛み締めながら階段を上りきり、間もなくして自室の明かりが目に飛び込んでくる。
途端に情けなくも安堵感を覚え、それと同時に張り詰めていた緊張が解かれたためだろう。単純な肉体の疲れとは異なる、泥のような疲弊感に見舞われて、駆け込むように五号室の扉を潜る。
「おーい、賢坊。ちょっと来なー」
隣室から、毎度の明け透けな声が届かなければ、そのようになるはずだった。

3

「……告っちゃいなよ。管理人さんに」
呼びかけに応えて現れた賢太が腰を下ろすなり。ガラスの座卓を挟んで向かい合う格好で座る朱里が、いきなりの発言で場を凍らせる。
「な、何。藪から棒に！」
唐突に勧められた賢太の胸には当然の如く戸惑いと、美幸への好意を第三者に指摘された事による羞恥が広がった。

「自分に自信が持てなくて、先に進むのが怖いから。せめて今の関係を壊したくない……ってか？　似た者同士よ、あんた達。……だから、とっとと告んなさい」
朱里は、一切の酔いを感じさせぬ断定口調で言い放ってみせた。
「そっ、んな……こと」
図星を指されてさらに慌てるのと同時に、青年の胸には「管理人さんも？」との疑問が生じる。賢太の知る美幸は、常に温厚で気配りを欠かさぬ大人の女性。我が事で手一杯の年下としては、気後れと憧れを抱くばかりの存在だ。
「脈があるから、告れっつってんの。あたしだって、鬼じゃないんだから玉砕しろなんて言わないわよ」
「い、一緒に飲んだ時に何か、管理人さんから聞いた……とか？」
「ん？　んー、ふふ。まぁ、日々酔いどれ客の話し相手を務めるホステスとしちゃ、ちょろい仕事だったわよ。……あんたの事、気にしてた。気負ってしまってるんじゃないかって、気づいてたよ管理人さん。あんたの事、ちゃんと見てくれてる」
心情を理解されていた、との朱里の言は、素直に嬉しい。
「で、でもそれは……管理人としての責任感からくるものなんじゃ」
その一方で、自信のなさに由来する疑念はなお晴れなかった。己の言葉に打ちのめ

されて俯きかける弟分を、朱里は――。
「あのねぇ。好きでもない相手の世話をああも焼くわけないでしょうが。あちらさんからの視線とか思わせぶりな態度とか、はたから見てバレバレだっての。……自分からはもう一歩が踏み出せないから、期待かけて待ってる。そういうとこ、今のあんたと一緒」
呆れ返った表情と嘆息とで出迎え、畳みかけるようにぶちまける。
（管理人さんが、俺……を？）
気にかけてもらえているという認識はあった。それが恋心に由来するものと思えなかったのは、大人の彼女に引け目を感じてしまっているから。その自信のなさは、今も朱里を仰ぎ見る顔にありありと浮き上がっている。
「……っとに、しょうがないわねぇ。……いいわ。自信、つけさせてあげる」
言い終えるが早いか、纏うスリップの肩紐に手をかけた朱里の上体が前に傾ぐ。
「あ、朱里さんっ⁉」
スリップから覗く深い胸の谷間に、注目せずにいられない。
わざと脇を締めた体勢で朱里が肩を揺らした。寄せ上げられて余計に大きく映る双乳が、プルプルと揺れて男の視線を釘付けにする。見つめるほどに触れたい欲求が高

まり、自然と賢太の口の中に唾が溜まった。
「な、何してるんですかっ。からかうのも大概に……」
驚愕と、制止しなければという気持ち。加えて、隠しきれない牡としての悦び、期待。混ざり合うそれらに侵された賢太がまごついている間に、あまりにもあっさりと肩紐は滑り落ち、朱里自らの手によって胸部が露出した。
「見るのも、初めてでしょ……？」
「よ、酔ってるんでしょ⁉」
童貞青年の慌てぶりと赤面を答えと受け止め、朱里が妖艶に微笑する。
圧巻。他に言いようのない光景が、賢太の視界を独占していた。
「管理人さんには負けるけど、大きさも形も割と自信あるんだ」
わざと美幸の事を持ちだして、意識させようと仕向けてくる。酔いの抜けた彼女の眼光の強さが、その本気ぶりを物語っていた。
朱里の真意を図りかねつつもまんまと思惑通り、先刻自身の腕に抱き留めていた想い人の胸の感触を思い出してしまい、賢太が口中にたっぷり溜まった唾を飲む。
眼前には、飲酒のせいか火照って息づく二つの巨峰。朱里自身の手で持ち上げられ、揺らされたその丸みから、露出して以降一度として目が離せないでいる。

「勃起してるの、わかる？　よぉく見て……。管理人さんにだって、同じ物がついてるんだよ？　ほら、想像してみ」

本人の言葉通り、充血して尖り勃っている乳首の様に、魅入られる。テーブルを回って肩触れ合う距離にまで寄ってきた朱里の素肌から香る体臭。甘くも蠱惑的なそれがまた、賢太の意識中枢を痺れさせ、判断を鈍らせる。

迫り来る乳頭の微かな息づきに注視する中で、飢えて渇いた己の唇を賢太は無意識のうちに舐め上げた。

自信をつけさせる、と彼女は言った。それは男として、という意味だ。おぼろげながら理解した頭の中もじき、乳の事で一杯になる。サイズも色合いも小豆に似た乳突起が口元に寄せられるに至っては、高鳴り過ぎた胸の動悸が眩暈まで誘発させる。

「管理人さんの……っ、おっぱい……」

瞬くのも忘れ凝視して、それが愛しい人の胸にも……と想起したが最後。タガが外れたように股間に血潮が雪崩れ込む。

掻いた胡坐を崩す、ただそれだけの振動で暴発してしまうのではないか。根拠のない不安と、そう思わずにはいられないほどの疼きに脅かされ、身動き取れなくなる。

いつもは鬱陶しく感じる事さえあるのに。今日この時ばかりは、横に腰を下ろし、

もたれかかってくる朱里の温みが、堪らぬ慕情を伴った。
「ふふ。賢太も。ちゃんと勃起してるね」
「うあ……っ、朱里……さんっ」
日頃のずぼらさからは想像もつかない繊細な手つきで、朱里の右手指が賢太の股間を撫で繰りだす。
ズボン越しの摩擦はじれったさを伴い、思わず呻いた賢太が姉貴分の顔色を窺った。そうして、弟の成長を慈しむようでもあり、事態を愉しんでいるのではとも思わせる、彼女の妖艶な微笑に魅入られる。優しさと貪欲さを併せ持つ手つきにも翻弄され、快癒の痺れが腰の芯に幾度も飛来した。
「ほら、感じるでしょ。おっぱいの感触。どう……？」
緊張に強張る青年の口元からあえて逃げ、肩先に乗せられたそれは、ふにふにと柔らかい。押し潰される肉感の重みと合わさって、否応なく牡の本能を揺さぶる。
それに酔いのせいか、火照り、汗ばんでいた。それがまた先刻「お姫様抱っこ」した美幸の体温を想起させ、朱里に失礼だとは思いつつ、さらに股間の猛りが増す。
「我慢しなくて、いいから」
「んぁっ」

耳に吹きかけられた吐息の熱っぽさ。触れそうで触れない距離を保ち、誘惑を紡ぐ唇の、ぽってりとした肉感。肩先に乗せられた乳房の重みと柔らかさに、勃起をさする手の動き。全てが連なり重なって、賢太の情欲を煽り育む。

耳朶と股間に轟くじれったくも切ない悦の誘惑に、なけなしの理性で抗おうとする賢太の様を見て、また朱里の唇に微笑が浮かんだ。

「自信つけて。自分の手で、管理人さんを愛してあげたいだろ？」

そのために必要な事、そう思えばいい。囁き終えると同時に撫でさする手で賢太のズボンのジッパーを引き下ろし、慣れた様子でトランクスのゴム紐部分から侵入して、ガチガチに強張った肉勃起をじかに捕らえてしまう。

酔いのせいなのか、朱里の指も手の平も思いのほか火照り汗ばんでいる。その癖滑らかで絡みつくように肉棒をさするものだから、驚き慄(おのの)きながらも呼応した肉棒が、悦びの熱と鼓動を吐き漏らす。

「っあ！　朱里、さんっ……」

逃がさない、とばかりにカリ首の下辺りを握り込まれるに至って、浮きかけていた賢太の尻が観念したように再度絨毯に沈んだ。それを受諾の意思と受け止めた朱里の目が、にこりと優しく――この時の賢太にはそう映った――細められる。

「ズボンとパンツ脱がすから、腰、もっかい持ち上げて」
握られた肉の棒と、握る手指とが、尻を上げる際の微細な振動で擦れ合う。雁首に刺激を受ける都度、腰の芯に鋭い悦の痺れが突き抜ける。
茹だるような熱に浮かされて、言われるがまま尻が浮いたのを見届けて、朱里が手早くズボンとトランクスを引き下ろす。
その間ずっと握られたままでいた肉棒の切っ先を、よしよしと、まるで子供の頭でも撫でるように指腹で擦られて、また。
「はぁうっ」
自分でも驚くほど甲高く上ずった、情けない喘ぎが口から吐き漏らされる。すでに多大な羞恥に見舞われて耳まで赤くしていた所に、下半身だけ丸裸という破廉恥な状況が付け足され、身の火照りは最高潮。体熱に茹でられた思考が、麻痺してゆく。
むしろ、自身の生殖器が女性の手に握られている、その様を直視する事で得られる興奮に、意識が眩む。
「……へぇ」
郷里で共に過ごしたあの頃の朱里が特によく浮かべていた、悪戯めいた笑み。小学生の目には親近感を覚える仕草として映ったそれが、今は。強烈に「女」を感じさせ

る魅惑の微笑と化して、緩やかな手コキ摩擦との相乗効果を成している。
「な、なに……？」
朱里姉ちゃん、と当時そのままの呼びかけをしそうになり、慌てて唾を飲む。自然と腹に力を込める形になって、より一層の摩擦悦に酩酊させられた。
「ふふ。泣き虫だった賢坊が、随分成長したもんだなーって、感心しちゃった。なかなかいいモノ持ってるよ、うん。これなら管理人さんの前に出しても大丈夫」
コレよコレの事、と肉棒の幹をくすぐられ、否応なしに嬌声をこぼれさせられる。
ガチガチに張り詰める肉棒の丸みを帯びた突端から、早くもカウパー液が染み漏れていた。それを見て、朱里がまた顔を綻ばせる。
「自分でするのとは、全然違うっしょ？」
「うぅ、う、んっ」
呻きとも、返答とも取れる弟分の声音に満足げに頷いて、朱里が思い切りしなだれかかってくる。
彼女の言う通り、自慰と違って刺激の予想がつかない分、不測の甘美に襲われた時の衝撃が強烈だ。ここ数日自慰をしていなかった事もあり、溜まりに溜まった情欲のマグマが今にも噴き出さんと、へその奥近辺で渦を巻く。

「どこが気持ちいいか、素直に言ってみ？」
掬い取ったカウパーを竿に塗り込めながら、悪戯っ子の顔をした朱里が問う。
手馴れた二十九の女性から見れば、童貞の弱点など反応から容易く発見できるはず。それでもあえて言葉に出させるのは、奥手な弟分の羞恥を取り除き、性欲により素直に向き合わせたいがため。
「す、すじっ、裏のっ……」
感極まった声で伝えれば、すぐさま朱里の指が蠢き、肉竿の裏筋を撫で扱く。垂らしたカウパーを馴染ませる緩やかな摩擦から始まって、徐々に速度と圧を上げてゆく。かと思えば急に圧を緩め、縦笛を吹く時のように運指を置き換え、巧みに射精欲求をコントロールする。
卓越した手管に炙り立てられるまま、我慢しきれなくなった賢太の口から懇願の台詞が飛び出す。
「さ、先っぽっ……あと雁の裏もっ、擦って欲しい……っ」
「よくできました」
竿を這い登った彼女の指が、偉い偉い、と亀頭を撫で繰る。滲んでいたカウパーを塗り広げながら下り戻って、雁首を締め付け、暴発しかけた射精衝動をまたも押さえ

込む。その上で懇願に従い、雁裏に圧の強弱を駆使した快楽を足し与えた。
「あぁあっ、はぅ……うっ、あ、朱里姉っ」
「イキたい？」
意地を張る理由は、とうにない。幾度も頷き、賢太自ら腰を揺すって、解放を請いねだる。下腹部に堆積した喜悦の痺れは、ひと塊の弾丸となって勃起ペニスに装填され、すでに竿の中ほどにまで迫り出していた。
血管を浮かせてパンパンに張り詰めた肉の竿。その熱と硬度を確かめた朱里の、左手が一度見せびらかすようにはためいた後。緩やかに降下し始める。
不安と期待。両極端な二つの感情に潤む賢太の眼差しの尾行を、あえて振りきらない下降速度を保つ一方。朱里は上体を賢太の胡坐の上に乗せて、ほくそ笑む。
「はぅぁ……ね、姉ちゃっ……んっ！」
腿に乗る勃起乳首の感触。硬さに驚き目を見開いた青年と、上体を震わせた大人の女。共にほぼ同時に、摩擦の歓喜に酔い痴れ、悦の声を吐きこぼす。
「あは、ぁっ……乳首、感じちゃう。ジン、ジンって、疼くの……賢太のおチンポ扱きながらビンビンに勃起して、切なくなっちゃってるんだよ？」
わざと明け透けな言い回しを用い、うっとり蕩けた目線までよこして、男の興奮を

煽るのを忘れない。十の歳の差、経験差を痛感する賢太のペニスが、素直にさらなる興奮に浸り、脈動した。

「あは。スケベ……。でも、嬉しいぞ。もっと素直に感じて、いいから……」

「あ、ぁあ。コリコリ乳首が擦れるのっ、チンコに響く……うぅぅ」

素直に答えた弟分の腿をひと撫で。そうしてビクリと跳ねる様を見つめ、まなじりを下げて笑みを濃くした朱里の顔と左手が、肉棒の根元へと接近する。

――そこは、駄目、やめて。切迫した想いを舌に乗せる暇さえ、賢太には与えられず。皺々の玉袋に触れた朱里の指が、ふにふにと揉み込みを開始した。

「はうんっ！　うあ、あぁ……！」

急所を間近で見られ、手の内で弄ばれても、屈辱感は芽生えない。切ない悦の痺れが、瞬く間に恥辱を恍惚へと塗り替えていった。

手淫のリズムに合わせて身を揺する朱里の乳房が、賢太の腿の上でたわみ、弾む。オンナを強く意識させる弾力と温みに陶酔していると、「永久にこの時が続けばいいのに」――瞬間的に、そんな願望すら抱いてしまう。

「好きな人にしてもらえれば、もっとずっと気持ちいいわよ。だから……あんたも管理人さんを悦ばせられるようになんなきゃ……ね？」

自分が美幸を――想像しただけで余計に血の充足した肉勃起が猛り盛った。雁首に抱き付く右手指を蠢かせ、朱里が「よろしい」と小さく囁く。そのまま彼女の唇が青年の亀頭に軽く一度口付けて――それが、とどめの合図となった。

朱里の右手指が、雁から竿の根元までを手早く往復する。左手指で玉袋、乳首で腿肉、吐息で亀頭。同時に各々を愛で蕩かして、賢太の迫り出す情欲のマグマの膨張を後押しした。

（あぁ、出るッ――！）

予兆を感じ取ったのが先だったか、それとも――。判然とせぬほど恍惚に耽溺した状態で尻をグッと持ち上げて、賢太の肉棒は朱里の手の内で猛々しく跳ね回った。一瞬後、まるで噴水の如き勢いで、白濁の粘性液が弾け出る。

初弾は朱里の指先を掠めて勢いよく、彼女の整った鼻筋へとぶち当たった。それが垂れ滴るよりも早く、第二弾が被さるように注ぐ。その全てを、厭(いと)いも避けもせず朱里の顔が受け止める。

弟分へのたっぷりの愛情を示すように、射精真っ只中の肉竿を扱き、射出の勢いを増す助力さえ惜しまれなかった。

「うぅ、っ！　はぁ、はぁはっ……あァ……朱里姉ちゃんっ、ごめん……」

「謝らなくていいって。賢太があたしの手で感じてくれた証拠なんだし。相手が喜んでくれたなら、頑張った女の方だって、嬉しいんだから」

子供時代の呼び名に戻っている事にまだ気づかない弟分を微笑ましく見つめる。そんな菩薩めいた表情の朱里の、精液まみれの指先が賢太の鼻筋を摘まんだ。

自身が吐き出した汁の生臭さが鼻孔を衝き、思わず眉間をしかめた弟分を眺め、心底から嬉しげに、朱里が声を上げて笑う。してやった、とでも言いたげな悪戯娘の表情。やっぱりこちらの方が似合ってるな、とつくづく痛感させられる。

「やぁだ。まだカッチカチ。よっぽど溜まってたのね。全部吐き出させてあげる」

ようやく肉竿からの吐精が終焉を迎えても、朱里は肉棒を握ったまま。まだ十分な硬度と熱々ぶりに感嘆し、目尻を下げている。

精液にまみれたまま微笑むその姿は、非日常的な淫靡さを醸していた。

（そんなに嬉しい、もんなんだ……）

先だっての自らの言葉を体現するように上機嫌の朱里の有様。

賢太はそれを、自分と美幸に当てはめて考えてみる。自分は、美幸が気持ちよく喜んでくれたならもちろん嬉しい、天にも昇る気持ちになるだろう。では美幸はどうか。美幸も、朱里のように悦びも露わに蕩けた姿を見せてくれるのか。

「……お？」
美幸の媚態と、その後に拝めるやもしれぬ至福の笑顔。想起するだけで肉棒に再び血潮が充足していった。
一寸驚き目を開いてから、またにんまり口角を持ち上げた朱里に、賢太が見惚れる。その間も、彼女の指による緩やかな摩擦愛撫は止まらない。刺激を甘受し続け、ついに肉竿は賢太自身の腹に張り付くほど反り返ってしまった。
その雄々しさを手指で確かめつつ。「よいせっ」という掛け声と共に、朱里が身を起こし、賢太の胡坐を跨ぐ。
見下ろされる形になった青年の眼に、向かい合う彼女自身が捲り上げたスリップの内側が映り込む。スリップの下は、素肌。ほろ酔い加減に火照った肌色の肉の丘を、黒い茂みが彩っていた。さらに目線を下げれば、ヒクヒクと息づく肉の唇と割れ目が飛び込んでくる。
「あ、朱里姉ちゃんっ？　ぱ、パンツはっ⁉」
「あんたが気持ちよさげに惚けてる間にね」
脱いじゃった、と言い放つその表情は、底抜けに淫蕩。まだ終わりじゃない。そう物語る姉貴分の腰がフリフリ物欲しげに揺らぐものだから、否応なしに目線で追いか

けてしまう。
「見える？　濡れてヒクついちゃってるの。ココに、今から賢太のチンポが入るの」
正直に言えば、子供時分には憧れを抱いた事もある。当時は今の美幸のように長い黒髪で、それを風に梳かし靡かせている様を覗き見るのが、堪らなく好きだった。
その朱里に、間もなく童貞を捧げる。射精の余韻もまだ残る中、酩酊感だけが増していき、まるで現実味が湧かぬまま。
ヒラヒラ、朱里自らの手ではためかされる、薄手のスリップ。その真下で、惜しげもなく晒されて透明の液を染み漏らす、肉の割れ目。甘酸っぱい匂いを放つそこに、今からペニスを挿し込み、抜き差しするのだ。現実を受け容れようと頭の中で反芻するほどに、へそ奥がむずつき、肉棒が滾った。
情欲と、かつての慕情。溶け混ざった激情を乗せた賢太の荒々しい鼻息を、見せつけっぱなしの股肉で受け止め、くすぐったさに下腹を震わせた朱里がはにかむ。
（大きい……）
迫り来る尻の丸みを見つめ、率直過ぎる感想が賢太の胸に湧く。尻肉を追う惚けた眼による視姦をも愉しもうと、朱里の腰が妖しくくねった。同時に彼女の手指が、先の射精でヌルつく賢太の亀頭を捕らえ、濡れそぼる女性器へと導く。

「ふ、っ、ぅあ、あぁ……」
宛がわれた女性器の温みとヌメリに、賢太の下腹が波打つ。じれったくも、悦ばしくもある甘い痺れを浴びて、男女の尻が同時に窄まった。
「あッ！　あぁぁあっ……！」
蠢動する陰唇に誘われるまま、滑るように肉棒が朱里の膣内へと呑まれていく。
「んっ……。童貞卒業、おめでと」
尻を弟分の胡坐の上、十数センチの所で留め置き、勃起ペニスを半ばほどまで食(は)んだ状態で朱里が囁く。余裕を漂わせつつもその頬にはさらなる火照りが差していて、彼女の興奮度合いも増している事が窺えた。
朱里が身じろいだ拍子に乳房が揺らぐ。甘い果実の如く実ったそれに、触れたくて堪らない。けれど床に置いた手を動かせば、それだけで暴発してしまいそうで――肉棒に襲来した初めての感覚をやり過ごすのに、手一杯。
（ほ、本当に入ってる。朱里姉ちゃんとセックス、しちゃってる……これが、女の人の中っ……凄い、うねって……）
膣内に飲まれたペニスの上半分。その全体が柔らかく湿った肉の襞に包まれ、緩やかな締め付けによって歓待されている。

温い――。またしても抱いた率直な感慨を賢太が噛み締める間にも、柔肉に突き立つ格好の亀頭から、雁首、幹へと、疼きと痺れが伝染する。

襞状に連なる形状を活用し複雑な蠢動を披露する膣肉に、感嘆と驚愕を禁じ得ない。そんな賢太の姿を微笑で出迎えて、膣肉の動きを演出する張本人の腰が、再び緩やかに下りだした。

「うぅっ……朱里姉ちゃっ……ちょっと待っ……あぁっ」

吸着した襞肉との摩擦はムズつきと恍惚を伴って、青年の口腔から呻きに似た喘ぎを吐き出させる。賢太の頭の中も腰の奥底も、初めて味わうヌメリと摩擦愛撫の相乗に眩みっぱなしだ。

（やばっ、い……でも、入れたばっかで出すわけにはっ）

挿入早々芽生えた射精願望を、下腹に力を込める事でギリギリやり過ごす。

「全部、入れちゃうから、それまで……ん、んんっ。イクの、我慢するのよ？」

子供に言い含めるような口調で朱里が宣告する。

肉棒を舐るように掃き愛でる膣襞の愛撫を凌ぐため。賢太は下腹の力みもそのままに、息も止め、朱里の尻が落ちきるのを、ただひたすらに待った。

先に一度、溜まりに溜まった精を吐き出していなければ、挿入の快楽に抗えず、即

座に朱里の膣内で果てていたに違いない。己の経験のなさと、膣内の心地よさとを痛感する賢太の胸を押し、寝そべらせた上で、ずぶ、ずぶと尻肉が落ちてくる。
「ぁは、ああ。硬いの、いい……わぁ」
悦び綻ぶ口元から思わずよだれをひと雫垂らして、ようやく朱里のラビアが肉棒を全て呑み込む。騎乗位で跨がる格好となった彼女が大きく息を吐き、一休みできるかと賢太が安堵した、その矢先。
膣内部のうねりが増し、どっと滲んだ熱い蜜が全方位より肉棒に降り注ぐ。不意の襲撃に身悶えた賢太の亀頭が膣壁を扱き、男女の口から同時に嬌声が吐き漏らされた。
「くぅ、んっ……はぁぁ……久しぶりだから、ちょい敏感になってる……」
鼻で荒く呼吸した朱里が、垂れるよだれと一緒に顔に付着したままだった精液も舐り取り、喉鳴らす。それからわざと口を大きく開けて、空になった事を示してみせた。
淫蕩ぶりを見せつける朱里の思惑に乗って、肉棒が嬉々と鼓動を響かせる。振動刺激に男女の腰が震えたのも、歓喜の呻きを漏らしたのも、同時だった。
「賢っ、太ぁ……いい、っ、よ、その調子ぃ……」
上体をのし掛からせた朱里が、いい子いい子、と頭を撫でてくる。
「……っ、は！　はあぁ、はっ、ぁぁ……」

褒められた事が素直に嬉しい。余裕をなくした賢太が、喘ぎと頷きとで応答する。童貞喪失の充足感が流入し、一度目の射精前以上に硬く張り詰めた肉勃起が、柔(やわ)い膣壁をこれでもかと押し込み、凹ませていた。

朱里の腰自体は動きを止めていたが、膣内では相変わらず複雑な蠢きが続行中だ。幾重にも連なる襞肉が勃起ペニス全体を揉むように包み込む。そのたびに賢太のへそ奥に溜まる情欲のマグマが噴き出しかける。

朱里の献身に報いたいとの一念で、賢太は悶え疼く腰に活を入れた。

「ゆっくりで、いいから。あちこち突いてみて、相手が感じる所を探すの」

一言一句区切って言い含める朱里に従い、徐々に馴らすように賢太の方から腰を振るいだす。初めての拙い腰遣いをカバーするように、朱里の尻もくねり、リズムを合わせてくれた。

「お互いに、目と目を見るの。そうやって相手の反応を窺う……あっ！」

尻を振りながら語っていた朱里の語尾が突如跳ね上がり、きゅっと引き絞られた膣内で肉棒が強烈な悦に呻く。どうにか悦の波をやり過ごした賢太の目に、背と、噛んだ唇を震わせて感じ入る朱里の媚態が映った。

「っ、ここが、いいのっ？」

「そ、そう。そこっ。ひぃぁ……っ、いいっ！　賢っ……太ぁ、もっとぉ」
目配せすると、朱里の汗が賢太の顔に注ぐ。合わせた胸も、染みた汗で幾度も滑る。おかげで、抱き付く彼女の乳房の感触がより鮮烈に、肌と記憶に刻まれた。
相手の悦びを引き出したい、そうする事が自分の喜びにも繋がるから。朱里の教えを反芻しながら、賢太は露見した彼女の弱点――膣内の上壁を重点的に擦り立ててゆく。ペニスを食む陰唇からこぼれるほどの潤みで膣内が満たされると、注挿もスムーズとなる。
また、彼女の背を抱き寄せる事で互いの胸を擦り合わせ、賢太なりの愛撫で感謝の意思を伝えもした。
「ふぅ、ン！　ンンァァ……ッ！　ぁは、今、中でビグンって……した、ぁ」
下からの突き上げを受け止める傍ら、腰を回して襞肉で肉棒を舐る朱里。膣の粘膜で予兆を読み取ったその声に、鮮明な喜びが滲む。
「ン……フ。もう……限界？」
蕩けた息を吐きながらの朱里の問いに、賢太が素直に頷く。彼女の表情に嘲りや不満でなく、待ちわびる意思が見て取れたからだ。
「じゃあ……一緒に……イこっか……」

そう、優しく囁きかけてくれたから。懸命に堪えていた枷を自ずと外し、溜まりに溜まった肉欲の衝動を解き放つ。

腰から肉棒へと装填された白熱のマグマが、亀頭に達するまでのわずかな間。彼女の願いを聞き入れるため持ち上がった賢太の腰が、ぬかるむ膣洞を往来する。

「やはっ、ああ……けん、たぁぁぁっ」

ひと際甲高く鳴いた朱里が改めてギュッと上体をしがみつかせ、尻を振る。その都度濡れた膣粘膜に引っ張られ、扱かれる肉の幹がけたたましく脈打った。合わさるように膣も収縮を繰り返し、しとどに漏らした蜜で結合部はヌルヌルの有様となる。

互いの息のかかる距離で見つめ合い、相手の悦を第一に考え腰を摺り合わせる。

「ま、たっ……出っ、る……うぅ！」

青年の呻きとひと際鋭いペニスの突き込みを受け止めて、満を持して膣肉が急収縮した。朱里の腰の回転も加わる中で引き絞られた肉棒が、盛大に震える。揺さぶられた膣襞がドッと新たな蜜を噴く。

「朱里姉……っは、あぁぁ……っ！」

「ああっ、あ――――……っ！」

にぢゃにぢゃと響く蜜とカウパーの撹拌音に、二人分の嬌声が被さった。

肉厚の陰唇に引き込まれて、より奥へいざなわれる――そう、賢太が感じた直後に朱里の腰が持ち上がり、抜けた肉の棒が宙に白濁の飛沫を噴き上げる。

抜ける際の摩擦と、みっちり吸い付いていた膣肉の温みを失った肌寒さとが合わさった結果。余計に震えた肉の棒が、真上の朱里の尻はもちろんの事、彼女の腹部、賢太自身の下腹にまで盛大に喜悦の証を吐きつけた。

波状に襲い来る絶頂感に溺れ。喘ぐ合間に朱里を見上げる。がに股気味に跨がり立つ彼女の、未だぽっかりと空いた膣穴が、蜜とカウパーの混合液をこぼし身悶えていた。それが絶頂に咽ぶ女性器の反応なのだと、酩酊めいた至福感の中で理解した。

「……自信。持てた？」

全て吐き出し終えた肉棒が萎み、賢太自身の股下に落ち着く頃。弟分の胸板を指で弄くりながら、身を預けてきた朱里が囁きかける。

「……ん。なんとなく、だけど。俺、明日からやれるだけの事やってみようと思う」

どこがどう変わったのか、上手く言葉では言い表せない。それでも明日からの変化に期待をかけ、賢太は肯定の言葉を口にした。

そんな弟分の心中を推し量ったのか。朱里はただ悪戯っぽい笑みを浮かべ、目を細めるばかりだった。

4

「あら、珍しい。揃ってお出かけですか？」

朝の早い時間にめかし込み連れ立って姿を見せた賢太と朱里を、ひなた荘の庭先で掃き掃除をしていた美幸が見つけ、声をかける。

「か、管理人さん。おはようございます」

一夜明けたとはいえ、朱里と肌を重ねてからまだ数時間しか経ってない。少しだけ美幸の顔を見るのが気まずく感じ、賢太の挨拶には硬さが滲む。

一方で美幸の様子を探る余裕が己の内に生まれている事にも気づいて、奇妙な清々しさもあった。

美幸は今日も、外履き用のサンダルにジーンズとスウェット。その上にエプロンを着けた、賢太からは見慣れた出で立ちで、にこやかな笑みを浮かべている。

「あの。昨日はどうも、ありがとうございました」

「管理人として、当然の務めですから」

礼を受けて顔を綻ばせる一方、視線を向けると照れたようにはにかみ、目を逸らす。

箒に隠れるわけもないのに身を、特に上半身を隠すように縮こまらせてもいた。その様は昨夜の朱里が言うように「確かな好意」と「自信のなさ」を窺わせる。

「朱里さんと一緒にお出かけなさるんですか？」

さりげない風を装って、美幸の視線が賢太と朱里の接触点――組まれた腕に注がれる。わずかに硬い声の響きに動揺が見て取れ、賢太の胸中に心苦しい気持ちと、同時に湧き立つような喜びが染み渡る。

「そ。デートなのよ今から」

追い打ちをかける朱里の平素以上に無遠慮な声の響きに、一瞬、美幸の身が強張る。想い人の目尻が吊り上がりかけたのを、賢太は見逃さなかった。

「そ、そうですか。受験生だって、たまには息抜きも必要ですわよね」

自制が働き、すぐに平静を取り繕ったものの、箒を握る彼女の手には必要以上の力がこもっている。口元には笑みが浮いていたが、いつもの華やぐようなそれとはまるで違い、無理をしているのがバレバレだ。

こんなにもわかりやすい反応をする人だったのか――。今更ながら本当の彼女の姿に近づけた気がして、賢太は悪いと思いつつも、また喜びを噛み締めた。

（騙すような真似をして、すみません。管理人さん）

朝、美幸が掃除をしている時間を見計らい、腕を組んで姿を見せる。デートだと告げて反応を見定める。全て、美幸からの好意を確認するためにと朱里が発案し、賢太も承諾の上で実行した事だ。

一芝居打ってようやく得た好かれているという実感は、今すぐ騙した事を美幸に謝りたい――そんな、罪悪感という副作用を青年の胸に抱かせる。

「じゃ、行こっか。デートに」

「本当に、仲がよろしいんですのね」

デート、という単語を殊更に強調する朱里と、頑なにそこには触れずに少しばかりの嫌味をとうとう口に出した美幸。腕を引いて歩きだした朱里と、すがるような眼で背を見つめてくる美幸。

どこまでも対象的な二人の女性の姿を見るにつけ、賢太は女性の奥深さを痛感する、そして再度、心の内で美幸に謝罪した。

「デートってのは嘘だけど、今日一日付き合ってやるよ。みーっちり女心のイロハを教えてあげる。もち、費用は全部そっち持ちな」

美幸に見せつけるように顔を寄せ、ひそひそと囁きかけてきた姉貴分。その発言に別の意味で胃が痛くなる思いもし、賢太は改めて密かな嘆息を漏らすのだった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/